



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2010 / 1 / 27(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 67

「一寸一言」 2009 ウインターカップを終えて

札幌山の手高校 上島 正光

事前対応

今大会は節目の40回大会、山の手20年連続28回目の出場、そして私自身山の手と関わって40年目という平成21年は私にとっても節目の年となった。

- ・夏の大阪インターハイでベスト8となり、シード権を獲得できたので、今大会の組合せでは選手のコンディション次第では上位に食い込むことが可能なポジションの組合せと思われた。
- ・チームの状態は、インターハイ後の国体道予選でキャプテン今野はじめ、ポイントガードの町田以外、主力選手が次々と怪我に見舞われ、10月に開催された新潟国体は最悪の状態で行なわれることとなった。

結果は聖カタリナ女子主体の愛媛県に善戦はしたものの、1回戦敗退という結果となった。

その後も今野、町田、長岡のスタートメンバーの怪我の回復が遅れ、さらに10月中旬にリバウンド、ディフェンスで最も信頼できる脇坂と、3ポイントシューター細川の両3年生が相次いで前十字靭帯断裂の怪我で戦列を離脱することとなった。

加えて、センター長岡がインドで開催されたU16のアジア大会に出場するため、合宿も含めて11月21日から12月9日まで長期の遠征となった。

帰ってきてから遠征の疲れもあって、目のヘルペスを患い、大会出発直前の練習復帰、今野は練習中に右手首脱臼、さらにフォワード本川も左肩を傷め練習できなくなり、出発する1週間前でも満足いく練習ができない状態が続いた。

今大会に向けてのチームのコンセプトとして事前に

- 1) 走力をつける
2レーンの連続5往復、オフエンストラジションで走力向上をはかる。
- 2) 1・1・3と2・1・2のマッチアップラインディフェンス
1・1・3時のコーナーディフェンスを補うため、また、長身者対策として両ディフェンスを用意。しかしながら主力選手の怪我で納得のいく練習ができず、不安要素を抱えた状況での出発となった。

20日より3日間富士通にお世話になり、大会出場チームと練習試合を実施する。今まで不十分な課題をこの合宿で向上させるべく臨んだが、センター長岡が練習不足に

よる体力不足で、リバウンド、ディフェンス、オフェンス全ての面で精彩を欠いていた。インターハイでは得点、リバウンド共にチーム No1 の活躍で中村学園高を破ってのベスト 8 に多大な貢献をして、1 年生といえども、チームの柱としての存在になっている彼女本来のアグレッシブなプレーが影を潜め気掛かりであった。

その様な中で、今まで 1 ピリ選手（全ピリオド安定したことがないため）といわれ続けていて、スタートメンバーのなかでは 1 番得点力が低かった本川が今回の合宿で大きく飛躍することができ、町田の安定したリードとシュート力、さらに今野の復調と徐々にチーム力が上向いて合宿を終えることができた。

いよいよ本番を迎えることとなったが、今大会ほど対戦相手の予想が大きく変わったことがなく、事前のリクルートと大きく掛け離れることとなった。2 回戦が初戦となり、龍谷富山が対戦相手と思われたが、県立富岡東が勝ち上がってきた。3 回戦の対戦相手昭和学院と勝ち進んだ時の桜花学園だけが予想通りで、準々決勝は聖カタリナ女子と踏んでいたが、初戦（2 回戦）で精華女子に敗れる波乱があり、その精華女子も岐阜女子に負けることになり、さらに、逆ブロックのベスト 4 の一角は大阪薫英女学院か金澤総合かと思われたが、山形商業が 3 年連続ベスト 4 となり、あらためて試合は未知数だということを感じ知らされることとなった。

試合経過

試合に関しては、インターネットで選評を検索できること、今大会より J スポーツで全試合テレビ放映されることになり、TACTICS を読まれている方は、既にテレビで試合を観ていることと思われますので、試合内容について要点のみの記述とします。

1) 2 回戦 12 月 24 日 山の手 103 - 68 県立富岡東（徳島県）

今まで数多くのドラマを生んできたシードによる 1 回戦不戦勝で 2 回戦が初戦という試合、今大会でもベスト 8 シードの明成、大阪薫英女学院、ベスト 4 シードの聖カタリナといずれも初戦で敗退する。

私自身幾度となくこのような結果を見てきているだけでなく、実際に経験もしてきているので、この初戦には特別な思いがあります。

しかし有利な点もある。

直前の対戦相手を観て対策を講じることができるので、出場選手全員で 1 回戦を観戦する。

特にスタートメンバーが 3 年生 1 人でポイントガードとセンターが下級生ということもあり、負けない試合の最も重要なリバウンド、ルーズボールの確認をして試合に臨むこととした。

2 分経過して 12-2 とリードするが、センター陣のディフェンス、リバウンド、ペネトレートに対する 2 線目、3 線目のディフェンスが機能せず、第 1 ピリオド 25-20、第 2 ピリオド以降徐々に得点差をつけるも、プレスダウンのミス、主力センター陣の不調、ディフェンスの悪さで 68 点の失点につながったが、今野の 19 得点、9 リバウンド、町田の 15 得点と冷静なリードにより 35 点差で勝利する。

2) 3 回戦 12 月 25 日 山の手 76 - 40 昭和学院（千葉県）

両チームとも 3 ポイントシュート 0、2 ポイントシュートも山の手高 3/7 33%、昭和学院 4/15 27%とシュート確率が悪く、第 1 ピリオド 6-10、第 2 ピリオドも昭和学院 3 ポイントシュート 0/5、山の手 3/7 と 3 ポイントシュートの差で、26-24 と 1 ゴール差のロースコアで我慢の前半となる。

第 3 ピリオドも昭和学院まだ 3 P シュート 0 と、2 ポイントシュートの確立が依然

と上昇せず、このピリオド 29-5 と大差をつける。

第4ピリオドになっても山の手のディフェンスが良い訳ではないが、昭和学院のシュートが決まらず 45%と 27%の差がそのままの結果となった。

今大会 2 試合を通じて長岡、千田のポストプレーヤーの不調を、1~4 番までのポジションを使いこなす本川が、全国大会で初となる 23 得点の活躍はこれからの試合に期待を持たせることとなった。

3) 準々決勝 12月26日 山の手 65 - 44 岐阜女子 (岐阜県)

聖カタリナ女子を破った精華女子と岐阜女子の試合は、さすが精華女子のエースガード金原 (U18 メンバー) をフェースガードでガード、オフェンスでは身長差を生かして杉浦 (180 c m) にボールを集めて作戦通りのゲームプランで勝利した岐阜女子との準決勝をかけた試合。

前の試合で活躍したガード中村、センター杉浦 (28 得点) を、今野と長岡でマークする作戦で試合に臨む。

町田のスチールからのドライブイン、ディフェンスの頑張り、またボールとプレーヤーが良く動き、流れのあるオフェンスが展開でき前半を 20 得点に抑える。

得点は 34 得点するも、センター長岡のシュートミスが目立つ。

第3ピリオドなか頃より、岐阜女子トラップゾーンを仕掛けてきたが、2度ほどスチールはされたが、ボールが良く回り 47-30。

第4ピリオド岐阜女子はハーフディフェンスで果敢にトラップディフェンスを仕掛けにくる。残り6分に 49-36 と 13 点差にされ、タイムアウトをとりダブルチームに対してムービングレシーブとパスの繋ぎを早くするように支持し、その後徐々に点差をつけ中村 6 点、杉浦 0 点に抑えて 65-44 で準決勝へ。

4) 準決勝 12月27日 山の手 46 - 82 桜花学園 (愛知県)

ここまでの 3 試合全てポストプレーヤーの千田、長岡の調子が上がらない状態が続いており、不安を払拭できないまま桜花学園との試合を迎える。

インターハイ準々決勝で敗れているだけに向かっていく気持ちを前面に出し、特にセンター渡嘉敷を意識せず、ボールをしっかり追い、動きを止めずオフェンスすることとして試合に臨む。

試合開始より連続 6 点を許し、タイムアウトをとるが流れを変えることができず第1ピリオド 11-27。

第2ピリオドになっても、シュートに結びつかないドリブルが多く、またポストディフェンス、リバウンドも支配され 5 得点しかできず 16-46 の大差となる。

第3ピリオドからオールコートマンツーマンプレスディフェンスにして、ようやくポストのダブルダウン、プレッシャーディフェンスでインターセプトやシュートミスを誘い、後半戦だけの得点は 30-36 となるも前半戦の大差を縮めることができず、内容の悪い試合となる。

5) 3・4位決定戦 12月28日 山の手 79 - 76 山形商業 (山形県)

この大会 2 年連続 3 位、前日の準々決勝も東京成徳と接戦しており、①全員がミドルレンジのストップシュートが得意。特にガード陣は縦にドライブしてからのストップシュートターンシュートで得点している。

②身長は平均身長で山形商業が僅かに上回るものの、5 番ポジションのプレーヤーが不在なので、ポストプレーを仕掛ける。

③3 年生最後の試合となるので 3 年生主体のスタートメンバーで試合に臨むことにした。

出だし、千田のハイ・ローポストで連続得点するも、シュート確率が悪く第1ピリオド 9-17、第2ピリオド町田のドライブなど 9 得点の活躍で前半を 31-34 の 3

点ビハインド。

第3ピリオド8:10に高田の3Pシュートで38-38の同点にする。

山形商業1・2・2のゾーンディフェンスにシフト、5:00までも高田の3Pシュートで48-46とこの試合初のリードで58-54。

第4ピリオド山の手さらに流れを変えるため1・1・3のゾーンディフェンス、残り7:00 65-58となったところで山形商業タイムアウト。

残り2:30 71-67になり再度、山形商業のタイムアウト。

山の手2・1・2ゾーンディフェンスに。その直後速攻のイージーシュートを失敗して、残り0:40に3Pシュートを決められ同点とされ延長戦へ。

追いつかれての延長戦、何としても先制点が欲しいところ、町田がドリブルでボールを運び自ら3Pシュートを決める。しかし直後に本川のディフェンスミスにより75-76とリードを許すが、その本川の連続ドライブインシュートで79-76。0:14山形商業タイムアウト。3Pシュート阻止を指示してコートへ送り出す。

山形商業ハーフからのスローインで試合再開。最後苦しい3Pシュートはうたれるも、勝利の女神が降りてきて4年前の3位に続く2度目の3位を獲得して大会を終える。

寸評

21年度最後の大会も桜花学園と東京成徳を中心に他校がどう挑むかが注目される大会。そのなかで特筆される、足羽（福井県）、山形商業（山形県）、精華女子（福岡県）のノーシード3校が関わった3試合を紹介します。

1) 桜花学園 102-82 足羽 （準々決勝）

1回戦から接戦というより、どちらかというと3試合全て逆転勝ちをして勝利してきた足羽の戦い振りは観ている人を引き付け、感動を与えるゲーム内容。

平均身長で9cmの差を感じさせないスピードと、積極果敢にゴールを狙いオールコートディフェンスを仕掛けて前半戦を終えて43-40の大健闘。

後半戦も積極的なプレーを展開して最後まで食らいつくも、渡嘉敷（191cm）に43得点され、最終的には102-82のハイスコアのゲームとなるが、渡嘉敷を39分もコートに立たせたこの戦いは、小さなチームに勇気と指針を示唆する内容となった。

足羽の林先生は、U16のヘッドコーチとして自チームに関わる時間を制約されるなか、今大会直前も、3週間ほどチームを不在（インドで開催されたアジアU16女子選手権大会出場、2位で世界選手権大会に出場）にしていたにも拘らず、失礼かもしれないがスター選手不在のなかで、ここまで臆することなく最後まで諦めないで戦う姿勢を育んできた指導には敬服します。

2) 精華女子 84-76 聖カタリナ女子 （2回戦）

精華女子は、今年優勝候補の一角である中村学園を地元予選で倒しての初出場インターハイに於いても97-98で東京成徳と大接戦の末に惜敗しているチーム。

メンバーは172cmのセンターで予想としては聖カタリナ女子が勝つだろう。

山の手が勝ち進んだとき準々決勝の対戦相手と予想、力量は充分実証済みだが身長差をどう戦うのか興味ある試合。

試合前の練習でダブルクラッチシュートを観たが、体幹がしっかりしていて足腰の強さが身に付いていることが窺えた。ドライブ、その合わせ、3Pライン近くからのジャンプシュート、特にポイントガードでポイントゲッター金原（163cm）のドリブルワーク、プレーメイクと得点力（33得点）に、まさに翻弄された試合。他の選手も競り合いに強く、リバウンドも39本と身長差を感じさせず相手を上回っていた。各ピリオドの得点も全て上回り84-76という結果となった。

小さなチームの戦い方のお手本として何回でも観たくなるようなチーム。このようなチームの指導方法を是非観たいものだと思います。

3) 東京成徳 86-76 山形商業 (準決勝)

中村学園とインターハイで東京成徳と大接戦した精華女子の合同チームに国体時に勝利している山形商業。今大会もインターハイ 3 位の金沢総合を退けての準決勝。いずれ日本の代表選手になるだろう篠原 (184 c m)、石原 (177 c m) のポストプレーヤーを擁する東京成徳。

ポストプレーヤー不在の山形商業は出だしからドライブからのミドルレンジシュートが小気味よく決まり、第 1 ピリオドはリードを奪い、その後も一進一退の攻防が続く。

後半一時インサイドのオフェンスを阻止できず離されそうになるが、佐藤 (175 c m)、武田 (165 c m) の両エースのドライブイン、ジャンプシュートで最後まで立ち向かうが、篠原 (30 得点)、石原 (23 得点) にゴール下を支配され、10 点差で負けるも、ゲームの組み立て方と、個々のシュート力の高さは 3 年連続ベスト 4 に入るのも納得できる。

因みに監督の高橋先生は大学時代もバスケットボール未経験ということですが。以上、紹介した 3 校は長身プレーヤーが不在でもコンスタントに上位に位置するレベルを維持しています。

3 チームに共通している点は

- ①技術に裏付けされた精神力の高さ→ボールに対する執着心
- ②鍛えられた運動力を生かしたプレーヤーの動きとボールの移動
- ③確率の高い 3 P シュートとミドルレンジの 2 P シュートを持っている
- ④ディフェンスの予測能力が身に付いている

指導者が望むプレーヤーが毎年揃うことは無いチームの方が多いわけで、指導者の努力と工夫、そして選手に熱いものを伝えているからこそ継続できると思います。

3 年連続の桜花学園と東京成徳の決勝戦は、桜花学園の優勝で幕を閉じましたが、前述したような素晴らしいチームを観、また対戦し、下級生主体のチームにとって良い経験を積むことができた。

山の手としても、今大会町田 (2 年 161 c m) が最高得点の 84 点、今野 (3 年 162 c m) が最高リバウンド獲得 40 本と両ガードが中心となり、今まで得点力の低かった本川 (2 年 174 c m) が 3 P シュート、ドライブイン、ゴール下シュートと 2 番目の得点 (67 点) となり、不調のセンター陣に代わって、大きく成長したことが幸運にも 3 位の原動力となった。

同じベスト 4 でも 4 位になったチームには選手にメダルが与えられないので、運良く 3 位になってよかったと思う反面、準決勝の桜花学園戦は、力を出し切れずにまだという思いで終わったのが悔やまれる。

脇坂、細川の両 3 年生は主力としてコートに立たなければならなかった存在であったが、怪我のためベンチ入りは叶わず、応援席でのプレーヤーとして (1 人はビデオ撮りのため 4 人で応援) 2 人が中心となり人数こそ最も少ないが日本一の応援で後押ししてくれた。

表彰式の後直ぐにコートに立てなかった 3 年生 2 人に、自分達が貰った 3 位のメダルを 1 年生 2 人が差し出した事が何事にも変えがたく、このことは 3 位以上の価値があり、今大会ミーティングで一体感、絆についてどれほど話し合いをしたか、自分で考え自分で判断をして勇気を持って決断したことを誇りに思います。

最後に、今野、町田のタイプの異なる両ガードが全試合コンスタントに、ディフェンス、リバウンド、得点に絡み、センター陣の不調にもかかわらず、精神面も含めてチームの先頭に立ち牽引した結果の3位。バスケットボールは騙しあい、そして場所取りのスポーツ。身長がなくても機動力を生かしたチーム造りは可能です。たとえスピードがなくとも相手が何をしようとしているのか、相手または味方の動きを先読みすること、すなわち目的意識を明確にすることにより攻防いずれも十分に機能することができる。

ドリブルのヘジテーション、サドンステップのようにスピードに緩急をつけることにより、相手を欺き振り放すことができる。さらに重心移動を大きくすることにより、相手より先に有利なポジションを確保することができる。これらのことは、むしろ身長の高いプレイヤーの得意分野であり、それなりの利点もあると考えられます。

実際1チームに3~4人の長身プレイヤーがいたとしても、ディフェンス面、オフェンスではガード的要素が備わっていないため、揃って出ることがないのはこのためです。

工夫次第ではいくらでも対抗しうるチーム造りはできると信じています。

勝つ前に良いチーム、そして負けないチームを目指し、今度こそその思いを実現できるよう日々努力することを自分に言い聞かせて終わります。

H B A（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会